

六條本願寺の末寺建立の爲め、數萬の材木・末口物幾千本も年々に宮腰に積置きけるを借用被成、京都へ言上ありて、車牛十疋被召下、彼の末口物の大材木共をば車にて引寄せらる。と三壺記に載せたり。若しは此の時小材木をば川船にて此の川筋より引揚げたるか。但し同書に元和の頃既に鬼川の名を載せたれば、寛永八年の事は後人の杜撰なるべし。御荷川の名は尾山本源寺の時よりの遺稱との傳説は、實を得たるならん。本源寺をば邑民尊崇して御山と稱すとの傳説にても知られけり。

○鬼川歌舞伎座跡

三壺記に云ふ。元和の初より、筑前守利光卿は、御在江戸と云ふ事なく、その故いかんとなれば、折々の江戸御参勤にも、御前様より頻りに御訴訟あるに付、二・三ヶ月にも足らずして、早速御歸城被成けり。御前様若君達の御慰とて、數ヶ所の芝居を淺野川・犀川兩所に建てならべ、あやつり歌舞伎の興行ありて、折々登城仕りければ拜領物影敷、其聞え京都・大坂に隠れなく、色々の藝者共望々に参りけり。其中にも犀川口鬼川の縁に女歌舞伎の座あり。大夫に

はお吉・鹽がま・十五夜とて三人の女あり。皆人是に異名を付け、楊貴妃・李夫人・勾當の内侍と申しけり。其の外十六七・廿許の女共三拾人有りて、兵庫わげに前髪を置き、朱かいらぎの大小に、金銀すかしの鍔・眞紅の下緒、印籠・巾着をまじへ、いつも若衆の出立にて、さま／＼の躍に狂言をまじへ、天下無双の猿若にて、随分面白かりければ、侍衆の奥方・子共衆、上下男女の嫌ひなく、札錢灰吹のこまがね三分づゝの事なれば、毎日數百人の見物あり云々。又金澤俳優傳記にも、御前様・御子様方御慰のため、淺野川・才川兩所に芝居見物場あり。あやつり・かぶきしな／＼のもの京・大坂にて名高き藝人共來り居けり。中にも鬼川の橋に、ながいと川といふ所に、女かぶきの座を建て、おきちしほがま・十五夜とて三人の大夫あり云々。と載せたり。是も三壺記に據りて記載せしものなるべけれど、おに川にながいと川といふ所に歌舞伎座を建つとあり。ながいと川といふ地今詳かならず。按ずるに、是舊藩國初以來金澤市中にて、歌舞伎座の濫觴なるべし。小松人二口某といふ人の筆記せる螢の光といふ冊子に、母の物語にて聞けるに、

享保の末歟、元文の頃か、江沼郡山中へ上方より藝者來て芝居興行す。是加賀國にて芝居の始りなり。と載せられたど、元和寛永の頃既に金澤に歌舞伎座ありて流行せしを知らざるもの也。

○板垣如風齋郎

元祿六年の土帳に、板垣小平出大工町少上後加藤傳右衛門近所。と見ゆ、延寶の金澤圖を見るに、古寺町の後。地にて、今裏古寺町と呼べる地なり。如風は、板垣氏の元祖小平知貞の男なり。幼名をば小十郎と呼び、成長して新藏信精と稱す。藩士奥村湍兵衛の女を娶り、一男一女を生む。然るに父存命中不行狀の事共ありて、寶永元年に父歿すといへども、父が遺跡は一男久五左衛門相續して家督す。新藏信精は寶永三年に落髮して、如風と稱し隱遁者と成り、一生俗事に關係せず。書籍を涉獵して世事を觀念し、元文五年十二月十二日天然にして歿せり。今舊家に傳來せる松梅語圖は、如風の著述にて、毎卷に北賀隠士春求信精述。と記載す。又群書採擷といふあり。此の書は年來涉獵せし記録の抜粹にて、書跋に享保十七年卯秋染老筆源信精。と書載せ

たり。尤賞すべき博識といふには非ずといへども、隱遁者の崎人なりし故、略傳を爰に載す。

○養智院前

此の地は、もと養智院の門前地のみを稱せしかど、今古寺町・木倉町の後、地の惣名となりて、此の地邊をば凡て養智院前と呼べり。

○淵光山養智院

眞言宗也。貞享二年の由來書に、當寺開祖元祐建立。正保二年竹中是三を以て寺地願上げたる處、翌三年犀川長門上・地町に於て、寺屋敷拜領被仰付、同年寺造營仕。とあり。按ずるに、竹中是三は、寛永四年の土帳に、御傍衆百五十石竹中是三。とあり。又長門上・地町は今云ふ長門町なり。此の町地は山崎長門の邸跡なりといひ傳ふれば、養智院の寺地は長門の邸跡なる地内なりしと聞ゆ。

○養智院一門堂

地蔵應驗新記に云ふ。金澤犀川長門町淵光山養智院一門堂の本尊延命大士は、弘法大師の彫造、立像長二尺三寸三歩也。往昔能州鳳至郡某寺に安置す。元祿六癸酉十月石川郡